

P2-25-6 地域周産期医療センターでの分娩時大量出血症例への対応の検討

宮崎県立日南病院¹, 宮崎市郡医師会病院², 健康保険人吉総合病院³
川越靖之¹, 山田直史², 瀬戸雄飛³, 山内 綾¹, 西村美帆子¹

【目的】当院は地域周産期医療センターとして産婦人科医師3人体制で救急搬送を受け入れ母体および新生児管理まで行っている。当院で経験した分娩時大量出血時の対応方法について検討した。【方法】2009年4月～2012年3月までの3年間の当院での3000ml以上の大量出血症例は7例であった。産婦人科3人体制では分娩時出血発生時にマンパワー不足となる。そこで大量出血発生もしくは搬送決定時に当院から総合周産期母子医療センター（以下総合医療センター）に連絡し母体、新生児蘇生医師の派遣応援を要請する体制をとった。同時に麻酔科医師に連絡、全身管理を依頼した。【成績】大量出血症例は7例（常位胎盤早期剝離2例、弛緩出血2例、癒着胎盤、子宮内反症、腔壁血腫、各1例）であった。3例は院内発症症例、4例は一次産科施設からの救急搬送症例であった。出血量は3061-4500mlでshock index(SI)は1.0-2.6であった。全例、濃厚赤血球、新鮮凍結血漿の輸血を行い3例で血小板輸血を行った。子宮内反症の症例では異型輸血を要した。弛緩出血以外の5例で総合医療センターから1-3名の医師、のべ9名が派遣され依頼から60分以内に当院に到着、診療に参加した。術後、全症例、集中治療室で全身管理を行い救命、無事退院となった。【結論】人員的制限を克服するのに総合医療センターと連絡を取り合い、医師の緊急の派遣で人的余裕が生まれ、危機的出血症例の救命に対応可能であった。

P2-25-7 産科異常出血に関する分娩様式別のリスク因子：6126例の多変量解析

自治医大
荻葉貴弘, 大口昭英, 斉藤こよみ, 馬場洋介, 渡辺 尚, 桑田知之, 薄井里英, 松原茂樹, 鈴木光明

【目的】近年高年妊娠が増加し、また肥満妊婦も増加している。日本人において肥満が出血量に与える影響については知られていない。出血量に影響する因子は多数あるため、産科異常出血に関する分娩様式別のリスクを多変量解析を用いて検討した。【方法】2006年から2010年の5年間に二施設（一つの三次施設と一つの二次施設）で分娩となった各4879例、1247例につき、変数増加選択法による多重ロジスティックモデルを用いて検討した。【結果】まず経陰分娩においては、高年（1.7倍）と低置胎盤（3.8倍）、常位胎盤早期剝離（3.5倍）が有意なリスク因子であったが、分娩週数、初産、帝王切開の既往、子宮筋腫、妊娠高血圧腎症、肥満は関連を認めなかった。また帝王切開分娩においては高年（1.6倍）、低置胎盤（2.2倍）、前置胎盤（5.8倍）、子宮破裂（8.4倍）が有意なリスク因子であったが、分娩週数、初産、帝王切開の既往、子宮筋腫、妊娠高血圧腎症、肥満は関連を認めなかった。また輸血に至った症例は経陰分娩で12例（0.34%）、帝王切開分娩で74例（2.8%）であったが、このうち産科異常出血でないにもかかわらず輸血を必要とした症例がそれぞれ8例（67%）、14例（19%）存在した。【結論】高年は経陰分娩、帝王切開分娩ともに産科異常出血の独立した危険因子であった。しかし肥満は産科異常出血とは関連を認めなかった。高年妊娠では産科出血に注意する必要がある。

P2-25-8 体操用ゴムチューブを利用した骨盤ケアが分娩時出血量に与える影響についての検討

窪谷産婦人科
古屋 智, 菊池美美, 香川珠紀, 高橋英彦, 窪谷 潔, 窪谷 健

【目的】妊娠・分娩・産褥期に適切な骨盤ケア（骨盤の緩みや歪みを改善し、正常な骨盤形態を保持すること）をおこなうことで腰痛・切迫早産・尿漏れなどの症状が改善し、分娩時出血量も減少するとの報告がある。今回我々は体操用ゴムチューブを使用した分娩時の骨盤ケアによって分娩時出血量に何らかの影響があるかどうかを検討した。【方法】2011年1月から2012年8月までに体操用ゴムチューブ使用下の分娩に対して同意の得られたA群（157例）およびチューブを使用しなかったB群（同時期の経陰分娩症例から乱数表により無作為に抽出した159例）で分娩時出血量を含めた諸因子を群間で比較検討した。A群では分娩第2期から分娩終了後2時間にわたり、左右の上前腸骨棘と大腿骨大転子の間および恥骨結合上を通る骨盤円周にチューブを強く巻きつけた。この介入操作以外は両群で同様の分娩管理をおこなった。【成績】分娩時平均出血量はA群：276±189g（範囲：36～1048）、B群：335±260g（範囲：46～1600）、また分娩時出血量が800g以上の異常出血症例はA群：3例、B群：11例であり、ともにA群で有意に少なかった（ $P<0.05$ ）。母体年齢、初産・経産の割合、分娩所要時間、児体重、機械的分娩例、産科麻酔施行例などは群間で有意差はみられなかった。初産例に限った検討では平均出血量はA群：268±167g、B群363±267gと有意にA群で少なかった（ $P<0.01$ ）。経産例では出血量に群間で有意差はなかった。【結論】体操用ゴムチューブを用いた骨盤ケアによって分娩時出血量は減少することがわかった。特にその効果は初産症例で顕著であった。異常出血症例数も減少し、分娩時の骨盤ケアは試みる価値があると結論された。